

# 花まるグループ「スクールFC」には 楽しい学びがいっぱい!

クイズ



名物講師 オオナカ 先生に聞く

## 小学校と中学校の英語学習の違い

親子が笑顔になれる「幸せな受験」を実現するスクールFCは、花まるグループの進学塾部門だ。受験突破のみを目的とせず、その後も続く子どもたちの人生を豊かにするため、「勉強の楽しさ」を伝えることを目指す。「英語って楽しい!」、そんな気持ちが中学生になっても続く指導に定評のある名物講師・大中康弘先生に、小学生と中学生に必要な英語教育の違い、スクールFCの英語の授業で実践していることを話してもらった。

中学校になると、英語の授業時間数が急に多くなり、内容も様変わりします。入学後すぐ、中間テストの勉強が始まります。保護者の時代の中1最初のテストは、アルファベットからスタートし、非常に簡単だったと思えますが、現代は難しく、最初からつまづいてしまう子どもも少なくありません。実際、高校受験の受験勉強で間違えたところをチェックすると、大半が中1の学習内容ということもあります。それくらい、中1で学習する内容は多く、

**中学では、本人の知的欲求をしっかりと満たして**

子どもたちがパフォーマンスを発揮できるのは、安心感のある空間だけです。習い事で英語を習わせるのは保護者の方の心理的安心感という意味合いが大きく、子どもの後の英語の成績にはそれほど優位性があるわけではありません。通うなら、保護者の方は、お子さんをよく観察してみてください。楽しそうならよいですが、嫌がる子どもにも無理やり習わせるのはNGです。

### クイズの答え

**A1**

a	b	m	n
b	o	l	p
c	j	k	r
d	i	f	g
e	h	w	x
f	g	x	y

**A2** : cat, bad, cab, eat, fat, far, ear, jam, rap, pay, sad など

生徒が作った翻訳絵本

▲カルタは絵を含めて大中先生が制作

## 子どもたちは絵本を翻訳! 学び続ける力が身につく

**小学生英語は4〜6年生**  
 スクールFCの英語が楽しい理由は、オリジナル教材にあります。4年生から6年生まで学年に関わらず、1年目は2冊から始まり、2年目3冊、3年目4冊と進みます。最初はQ1のように遊びながらアルファベットを覚えます。それからイラストと単語が記されたフラッシュカード(写真)を使って、発音をリピートしてもらいます。ここで使う単語はテキストにもあり、授業の後半で確認します。たとえば、"apple"をフラッシュカードで覚えます。何度か繰り返すと綴りも何となく記憶に残ります。次にテキストで定着度を確認します。テキストには、ゴリラのイラストとともに、Gから始まる単語が3つ。"Gorilla", "Gorilla", "Gorilla"が並んでいますが、そこから記憶を頼りにゴリラの英語を見つけてみます。単語に慣れたら、カルタで遊びます。イメージと英語の音の方が日本語の意味と英語よりも結びつきがよいです。私の描いたイラストが表、裏にはそれを表す英語が書かれています。読まれた英語のイラストが描かれたカルタを取ってもらいますが、かなり盛り上がりです。たまに私も取る側になりますが、子どもたちのカルタを取るスピードには驚かされません。ステッパップすると、単語ではなく、3つ文が入っているカードになります。

**消しゴムが走る!?**  
 工夫しているのは、少し常識はずれな情景。「消しゴムが走る」とか「象が字を書く」など、子どもたちはツツコミを入れながら楽しんでくれます。楽しみながらひたひたでも500単語に触れます。500以降は中学でつまづきやすい動詞の使い分けなどの本格的な英文法を学び始めます。さらに、スクールFCの大きな特徴は「翻訳家の時間」で、子ども自身が絵本の翻訳を行います。自由に意訳したものを、実際の書籍のように綴じます。イラストを描くことは指定していませんが、みんな楽しそうに原書を実例添えてくれます。小6の時に「おきなぎ」を友人と協働して訳した生徒2人は、その後、中2で英検準2級を取得しました。スクールFCで英語を学んだ卒業生たちから、「英検準1級にチャレンジします!」とか「英語話せるようになりたいんですね」という報告を受けると「興味が続いているんだな」とうれしくなります。皆さんには、小学生のうちとにかく「楽しめ!」とお伝えしたいです。その代わり、中学生になったら訓練量が大事なので、サボらず続けること。英語上達の秘訣はそれだけです。

**小学生までは「英語は楽しい」という原体験をつくるのが大切**

小学校で英語が必修になってから、英語を楽しむ子がいる一方で、嫌う子も少し目立つようになってきました。人は本質的にわからないものは「怖い」と感じるものです。ALT(外国語指導助手)は基本的に英語しか話さないことが多いので、「何を言っているのかわからない」という不安感が先立ちます。また、みんなに合わせて笑っていないとすかさず寄ってきて、「一緒にやろうよ」と英語で促されるなどの雰囲気苦手な子もいます。コミュニケーション中心で、時間が少ないこともあり、知識の蓄積がまま進んでしまうことも問題です。

子どもたちがパフォーマンスを発揮できるのは、安心感のある空間だけです。習い事で英語を習わせるのは保護者の方の心理的安心感という意味合いが大きく、子どもの後の英語の成績にはそれほど優位性があるわけではありません。通うなら、保護者の方は、お子さんをよく観察してみてください。楽しそうならよいですが、嫌がる子どもにも無理やり習わせるのはNGです。

大事なのは、伝われば許されてきた綴りや文法の間違いが、「間違えてはいけない」となってしまうことは、小学校と中学校の英語の大きな違いでしょう。中学では、文法解説を重視してしっかり指導してくれる先生が理想的です。綴りや文法を論理的に納得できることが、子どもたちの安心感につながります。子どもたちの「ちゃんと知りたい」という欲求を満たしてあげることが大切です。

また、定期テスト対策をしっかり行い、テストで点を取れるようにすることも大切です。授業内容が大事なのももちろんですが、テストで点を取れたこと自体が子どもたちの安心感とモチベーションにつながるからです。

外国語の学習はスポーツと似ています。プロアスリートも、原点は遊びとして出会ったときの「楽しかった!」という経験にあります。小学生のうちは、英語が「嫌だった」経験をしないようにすることが大切です。しかし、上達するには継続的なトレーニングは欠かせません。中学生になってからは、文法を中心に、繰り返し訓練し、書いて、型を身につけることが大切です。「嫌でもやる」ことを続けるうちに、実力が上がってくることを実感できます。そうして中学でしっかりと土台を作れば、高校、大学と進学した時にも力を発揮できます。

**大中 康弘先生**  
 スクールFC教務部英語科教科長。TOEICスコア985。英検1級。高校生の頃「自分で作った曲に英語詞をつけたい」と、英語を独学で習得。花まる学習会六本木教室「英語花まる」の創設に携わり、現在授業の監修を担う。スクールFC浦和校で長年教鞭をとり、公立では県内トップ校や、私立では早稲田、慶應など最難関校への合格者を多数輩出。スクールFC「小学生英語」講座では、オリジナル教材を作成。自ら教壇に立つ。「英語は大中先生に聞けば間違いない」と生徒たちに言われるほど絶大な信頼を得ている。著作に「小学生が一番覚えやすい英単語500」(PHP研究所)、監修に「マンガでわかる!10才までに覚えたい英単語1000」(永岡書店)。